

♪ 2022年度 **poco a poco** ♪

Nr. 11 2022年9月1日(木)

文責:プファイル・辰巳

## ワクワク2学期の始まり!

みなさん、夏休みはいかがでしたか。元気に楽しく過ごせたでしょうか。この夏はドイツも暑かったですね。雨がほとんど降らなかったため、芝生が茶色になり、木々の葉っぱも早々に色づいたり、枯葉になってしまったり。川や湖の水位も下がり、山火事も心配されました。日本では洪水の被害が出るほどの大雨が降った地域もあるというのに、困ったものです。さて、この後秋に向かってどのような天候になるのでしょうか。いずれにしても、長丁場になる2学期を元気に過ごしたいものです。学校生活のリズムを早めに取り戻してくださいね。



2学期もよろしくお願いします!

## 音楽こぼれ話 <その時、作曲家は... ⑨ ヨハネス・ブラームス

### 着想から完成まで約20年「交響曲 第1番 ハ短調」>

「ドイツ3大B」と呼ばれる作曲家は、バッハとベートーヴェン、そしてブラームスの3人です。バッハとベートーヴェンの作品についてはすでに取り上げましたので、今回はブラームスの「交響曲 第1番」を紹介します。

ヨハネス・ブラームスは1833年に北ドイツの大都市ハンブルクで生まれました。貧しい家に生まれたブラームスは、13歳ごろから家計を助けるためレストランや居酒屋で得意なピアノを弾くアルバイトをしていたといえます。

お父さんも市民劇場のコントラバス奏者だったので、貧しいながらも音楽の勉強を

続けることは認めてくれたようで、ピアノの他に作曲法もブラームスは学びました。

20歳になったブラームスは、友人に勧められ作曲家シューマンの門をたたきます。この出会いはブラームスにとって人生の転機になりました。ブラームスの作品を聴いたシューマンは感嘆し、ブラームスを期待の新進作曲家として、自分が企画発行していた音楽雑誌で紹介したのです。シューマンはこの翌年、自殺未遂を犯してしましますが、ブラームスはその後作曲家として順調に活躍し、やがて音楽の都ウィーンに定住します。

10代から作曲を始め、ピアノ曲や歌曲、室内楽など数多くの作品を作曲していたブラームスでしたが、交響曲の作曲、発表に際しては非常に慎重に取り組みました。これは偉大なベートーヴェンの交響曲を意識するあまり、それを超えたと自分で納得できる作品にまで推敲を重ねていたため、「ブラームスの交響曲第1番」が完成するまでに、約20年かかったとされています。

推敲に推敲を重ねてようやく交響曲第1番が出来上がったのは1876年のこと。20代前半に思い立ってから歳月を経て、ブラームスは円熟の40代を迎えていました。

出来上がった「交響曲第1番」は、ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」と同じハ短調で作曲されています。また第4楽章に出てくる主題は、ベートーヴェンの交響曲第9番の「歓喜の歌」を思わせるメロディになっています。暗(短調)から明(長調)へと、負のスパイラルを断ち切る生命力を感じさせる曲の流れもベートーヴェン的です。

このようにベートーヴェンの交響曲を正統的に受け継いだ曲となったブラームスの「交響曲第1番」は、「ベートーヴェンの交響曲第10番」と呼ばれるべき出来栄だと、高く評価されました。「交響曲第1番」を完成させた後のブラームスは、ベートーヴェンの魔力から解放されたように、比較的短い期間で第2番を完成させたそうです。とはいえ、生涯で交響曲は結局4曲しか作曲しなかったブラームス。その中でも特にベートーヴェンの生命力を受け継いだ交響曲第1番は、今日でも最も演奏される機会が多い作品の一つとなっています。

## ほんのちょっとだけ 演奏会情報

10月9日(日) アルテオーパー・大ホールにて

19:00 から バンベルガー・シンフォニカーと内田光子の共演

ベートーヴェンのピアノ協奏曲 第5番

シュトラウスの交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」他